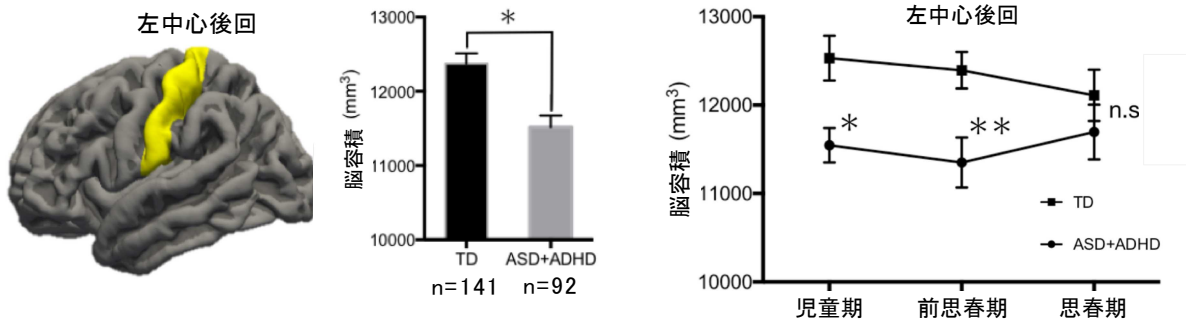


自閉スペクトラム症と注意欠如多動症の 併存患者における脳形態の特徴を解明

福井大学子どものこころの発達研究センターの友田明美教授らの研究グループは大阪大学大学院連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センターとの共同研究により、自閉スペクトラム症と注意欠如多動症の併存患者は、定型発達児よりも左中心後回の脳容積が少ないことを明らかにしました。さらに、この異常は児童期と前思春期のみに認められ、思春期では認められませんでした。この結果は、左中心後回の成熟遅延に起因する異常な体性感覚が、自閉スペクトラム症と注意欠如多動症併存患者の中核症状に繋がっている可能性を示唆しました。本研究は、診断や評価に資するバイオマーカーが未確立である発達障がい児の脳形態の特色を、脳形態 MR 画像で可視化し脳科学的に立証しました。本研究の成果は、2019 年 12 月に英国科学雑誌「Translational Psychiatry」に掲載されました。



Mizuno Y, Kagitani-Shimono K, Jung M, Makita K, Takiguchi S, Fujisawa TX, Tachibana M, Nakanishi M, Mohri I, Taniike M, Tomoda A. Structural brain abnormalities in children and adolescents with comorbid autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder. *Transl. Psychiatry* 9, 332 (2019).

<研究支援>

本研究は下記の日本学術振興会科学研究費補助金の支援により実施した成果です。

基盤 A、JST/RISTEX、日米科学技術協力事業「脳研究」分野グループ共同研究助成、
武田科学振興財団特定研究助成: いずれも友田明美

若手研究: 水野賀史